浪高から東大へ
―― 木村勝造氏に聞く ――

今　西　　一

はじめに

2011年の９月10日，アメリカのクリントン国務長官は，9.11の同時多発テロから10年を迎えるに当たって，テロの脅威は減少するどころか，ますます増大しており，ニューヨークやワシントンが狙われていることを強調した（『毎日新聞』他）。日本では，震災や原発事故，台風のニュースのなかで忘れられているが，世界中でウサーマ・ビン・ラーディンの銃殺以後，テロの脅威は日増しに強まっており，アルカイダも新しい犯行の予告宣言をだしている。

私たちは，1994年のオウム真理教による松本サリン事件，翌年の東京地下鉄サリン事件以降，特に無差別テロを実感するようになった。しかし，オウム事件を取材した宮内勝典氏が語るように，「いったん自己同一化してしまった集団・共同体のためならば，いともたやすく命さえも投げ出してしまう。虐殺もする。玉砕もする。（中略）そして自分が帰属する集団を守るためなら，どんな嘘でも平然とつき通すだろう。敵は殺す。むろん現代社会で，そんな本能がむき出しになる状況はほとんどない。だが帰属する集団が危機に陥ったとき，あるいは戦争に突入したとき，結局は，遺伝子レベルの行動パターンを取ってしまう」のである（『善悪の彼岸』集英社，2000年）。

宮内氏の言うように，「遺伝子レベルの行動パターン」という長い時間帯の問題に解消していいのか，というのは疑問がある。しかし，「日本人にかぎったことではない」が，とりわけ日本の歴史のなかでは多く見られる現象である。オウム事件の時にも議論になったが，「オウム」は「例外」現象ではなく，戦

時下の日本そのものであった。また，天皇制国家の側だけではなく，反体制運動のなかでも，連合赤軍事件をはじめ，凄惨なテロやリンチの歴史はくり返されている。私は，ここ数年，1950年前後の日本の学生運動の歴史を勉強しているが，白鳥事件をはじめ，その「左翼のテロ」事件は，いまだ全貌さえ明らかになっていない（拙稿「北大・イールズ事件から白鳥事件まで」「北大・1950年代の政治と学問」『商学討究』第61巻4号，第62巻1号，2011年）。

私が，この問題を調べるきっかけになったのは，1951年2月の東京大学の共産党学生細胞内での「スパイ・リンチ査問事件」を調べてからである。同事件の被害者は，戸塚秀夫（東大名誉教授），上田建二郎（不破哲三，元日本共産党議長），高沢寅男（元社会党副委員長，故人）氏の三名である。高沢氏は鬼籍に入ったが，戸塚・不破氏は健在であるが，この事件については何も語っていない。不破氏にいたっては，何冊も自伝を書きながら，一切触れようとさえしないのである。査問の中心になったのは，力石定一氏（法政大学名誉教授）と武井昭夫（てるお）氏（評論家，故人）である。武井氏は逝去されたが，力石氏のインタビューは実現した（拙稿「第三高等学校から東京大学へ」『人文研究』第119輯，2010年）。木村勝造氏は，事件の現場に立ち会っていて，「東大細胞の終わり—「戸塚事件」の記憶」という貴重な記録を残している（『一・九会文集』第2集，1997年）。その記録の内容を少し紹介しよう。

1951年当時の東大細胞（「支部」のこと）には，ゲハイムニス・パルタイ，通称GP（ガーペー，ドイツ語読みすれば，ゲーペーだが，秘密を守るため強いて読み替えた）という普通党員には秘密の中核組織があり，その上位指導部として，EC（エグセキュティブ・コミティーか）があり，このECが，日本共産党の国際派の指導部であった，宮本顕治氏（元日本共産党議長，故人）と繋がっていた。「東大細胞と宮本の関係は，ずっと以前から深く，宮本は人間味もある，高潔な指導者として別格の尊敬を受けていた」。このエリート組織が，200名を超える全細胞の上に君臨していた。このような二重組織を作ったのは，「徳田球一ら日共主流派の，いわゆる所感派分派に対して，別の党組織をつくっ

て日本共産党を分裂させるイニシャティブないし責任を負うまいとする宮本の強い方針に沿いながら，同時に自派組織の維持をはかろうとする，いわば苦肉の策」であったと木村氏は理解している。1950年の「コミンフォルム批判を受け入れる過程で，東大細胞内部に分裂がおき，所感派にやや妥協的だった大久保博司をキャップとするLC（細胞指導部）を不信任した東大細胞の内部闘争の経過の中，後にガー・ペーに発展する同志的集団が形成された」。そして木村氏の回想では—

> 寒い日の午後早く，ガー・ペーの主だったメンバー10数名が，ECに招集された。場所は細胞が事実上占拠していた安田講堂からみて左側法文経のビルの三階のラセン階段の最上部の，何もない一室である。そこにまず数名が床に車座に座った。力石定一・武井昭夫が，ECとして当然のように対座した。力石がまず口をきった。「最近のように闘争が先鋭化してくると，われわれの組織にも，敵の手が入ってくる。このため，われわれの組織も点検を強化しなくてはならない。そこで全員について，査問を行う」という趣旨だった。

この集まりより前に，木村氏らは理学部の一室に集められ，理論についての「筆記試験」と「性的腐敗行為」についてのレポートを書かされていた。査問そのものは，高沢寅男氏には「案外ゆるやか」であったが，戸塚秀夫氏の番になると，「様相は一変した」。思想内容，私生活，特にスパイ活動の有無についての激しい追求に変わった。いくら「ぼんやりの私にも，この日の査問の目標が自分ではなく，いわんや全員の点検などでなく，戸塚を主目標とする，極めて切迫したスパイ事件の取り調べであることがやっと解ったのである」と木村氏は語っている。これが，「戸塚事件」とも言われる，東大の「スパイ・リンチ査問」事件の開始であった。「査問の場所は，最初の東大内の荒れ部屋から，あわせて三，四か所の下宿や寮を転々とし，戸塚の脱走まで四週間ほどは続いた」。木村氏が「参加したのは，東大の，二，三日で，後の更に激化した査問の現場は見ていない」。

査問は，「理論，金，女性関係，官僚主義」について追求されるが，「青年ら

しい行きすぎた自己追求のパターン」と言える。だが「内容的に殆ど下らない追求に対する疑問」さえ起きなかった。木村氏は，太宰治氏（作家，故人）の「純粋ごっこ」という言葉を使っている。査問の具体的な内容は，戸塚氏が，平素からアメリカのマガジンに親しみ，アメリカ映画『腰抜け二挺拳銃』の主題歌「ボタンとリボン」を口ずさんでいるのが怪しいとするものである。

もちろん早稲田大学細胞の松下清雄（すがお）氏（作家，故人）からの「密告」によって，スパイ活動をしていた疑いが戸塚氏にかけられており，その追求は凄惨なものになってくる。竹中一雄（国民経済研究協会顧問），富塚文太郎（元東京経済大学学長），安東仁兵衛氏（職業革命家，故人）らが戸塚氏に迫り，竹中，富塚氏は戸塚氏を殴打している。しかし，査問の一日目から戸塚氏のスパイの嫌疑には動揺が生まれていたが，力石氏はそれを武井氏には言わず，査問は続行された。高沢，不破氏は別の所に移され，監視がついていたが厳しい拷問は行われなかった。

どこかのしもた屋に移されてからは，「武井をはじめとする査問はすさまじく，あるとき武井が目の前の火鉢から火箸を抜いて戸塚に突き付け，脅迫した」。「このとき，戸塚は疲労のため泡を吹いて倒れ失神した。（中略）力石らの制御的な態度にもかかわらず，武井は焼火箸を戸塚の手に押しつけた」。結局，戸塚氏が自殺未遂をし，その遺書を読んだ宮本顕治氏らが査問を止め，最悪の事態は防げた。しかし，一歩間違っていれば，「リンチ殺人事件」になっていた。

しかも，東大細胞は総会を開き，戸塚，不破，高沢氏をスパイとして除名している。ここでの武井報告は，ありもしなかった戸塚氏の「女性関係」の乱れなどをデッチ上ているが，さすがに法学部の山岡某という党員は，「こんな話で，戸塚以下をスパイとどうしてできるのか」と批判している。この時，木村氏らは，「主観的にはスパイでなくても，客観的にはスパイと認められる場合がある」という「屁理屈」で逃げている。

戸塚氏らのスパイ容疑は認められ，「東大細胞総会の結論が下部組織の新制東大（旧一高，新制度の教養部），東京中の国際派学生細胞，特にスパイ情報の出所だった早稲田大学の「ボリシェヴィク」派に通達され」，「スパイ狩り」

が行われるようになった。しかも，「戸塚事件後，表面上はともかく，東大細胞はかつての全人格的投与（ルカーチの言葉）のエネルギーに満ちた独自の力を急速にうしなった。北京批判による国際派の解散にしたがって，雲散霧消するだけのものになった」。木村氏は，「戸塚事件」によって，「東大細胞の本当の歴史は終わった」と結論づけている。しかし，この後も55年の日本共産党第6回全国協議会（6全協）まで，「スパイ査問事件」は各地で続いて行なわれている。

なお木村氏が卒業した旧制の浪速高等学校（現大阪大学）は，戦後直後の関西の学生運動の拠点校であり，東大では木村氏や比較文化論の沖浦和光氏，京大では歴史家の戸田芳実（故人），同中塚明，元全学連委員長の米田豊昭氏（故人）など多彩な活動家を輩出している。戦前の浪高では，後にロンドン大学教授となり，何度もノーベル賞の候補になった経済学者の森嶋通夫氏（故人）が有名である。氏には，浪高時代を回想した『血にココリコの花咲けば』（朝日新聞社）という回想記がある。

また俳優の戸浦六宏（東良睦宏）も有名人で，結核療養所の患者に物資の横流しを糾弾するビラをまいた容疑で検挙されている。1943年当時，「300人足らずの高等科生のなかに60人余の共産党員が」いたと言う（『青春風土記』第3巻，朝日新聞社）。

木村氏へのインタビューは，2010年10月16日，大阪府下の木村氏の自宅近くの喫茶店で行った。不自由な車椅子生活のなかで，私のぶしつけな質問に，木村氏はよく答えて下さった。木村氏の最後の職場が，龍谷大学の文学部であり，何人かの親しい先生の思い出もでたが，「龍大から研究者が出たのは嬉しい」と，何度も語っておられたのが印象的であった。本稿は，北海道情報大学非常勤講師の天野尚樹氏に下書きを作ってもらい，早い時期に木村氏に加筆してもらったが，掲載が遅くなったことをお詫びする。

木村勝造氏へのインタビュー

1　生い立ち

今西：まずお生まれからお伺いします。

木村：1929年1月21日，大阪で生まれました。父親は広島県出身で，榎並影夫という名前でした。ちょっと珍しい名前です。広島市からそう遠くない，酒で有名な山の中の土地で中農だったようです。独立自営農民に近い状態だったらしい。それが大正時代になって農業がだめになり，いわば追い出されて，全財産を放棄して，一家で大阪に出てきたそうです。その時にはすでに結婚していて，大阪に出てきてから私が生まれました。

今西：お母さんも広島の方なんですか。

木村：そうです，松浦キミという名前でした。私は大阪の木村権治郎のところに養子に入ります。お祖父さんがこんにゃくの卸問屋をやっていたそうです。養父は毎日寝る前に飴玉をなめていたせいか，50歳ぐらいで歯が全部ありませんでした。私も，親父というのはそういうものかと思っていました。養母は木村スヱといいまして，私にとってはとてもありがたい存在でした。非常に子供を愛する人で，大変かわいがってもらいました。戦争のとき，大阪大空襲で焼け出されるのですが，養母は，貯金通帳から何から大事な書類を白い袋に入れて肩からかけて無事だったのを覚えています。

今西：小学校はどちらに行かれたのですか。

木村：淀屋橋の愛日小学校というところです。現在の三菱東京UFJ銀行大阪本店の向かい側にありました。まわりは大きな屋敷ばかりでした。大阪でもトップクラスのいい学校で，当時としては珍しかったプールがありました。本当は学区外で行けなかったのですが，うまく話をつけたようで，試験を受けて入ることが出来ました。机に紙に書いた名前を貼るですが，そこに最初「榎並勝造」と書いてあったらしい。ぼくは見ていないのですが。それで親父が話をつけたのでしょう。はがして「木村勝造」と貼り直してあった。なんのことだかその時はよくわかりませんでした。自分が木村の籍に入っていることは，戦後旧制

高校に入ってから，書類を見て初めて理解しました。

父親は松浦キミと離婚します。父の母親の意向だったようです。影夫本人は不本意だったようですが。それで私は行き場がなくなって，当時2階に間借りしていた木村の家に預かってもらうことになったのです。そうしたら，木村の家でも離し難くなって，父親にしても都合がよかったのでしょう，私は木村家に養子縁組されることになりました。木村家と榎並の間の関係で何か言ってはいけないことがある，ということを，子供というのは感覚的にわかっているものです。たとえば，木村から，誰がいちばん好きか？と訊かれたら，木村のおとうさんがいちばんや，と答えていました。そのあたりの機微は子供ながらに感じていたものです。榎並を上位に持ってきてはいけないと。

勉強は，はじめのころは全然出来ませんでしたが，後になってわりと出来るようになりました。養父は頭が古くて，例えば，野球というのはアホな人間がするものだと言って，やらせてもらえませんでした。ですから，中学になってもボールを捕ることができませんでした。そういううるさい家が多かったせいか，学校でも体操の時間は休んでも平気でした。2～3人位はそうして見学している子がいました。

今西：昔はその辺がルーズだったのでしょうね。

木村：ルーズでしたよ。そうして受験をすることになりますが，中学を受けるか商業学校を受けるかが決定的に問題でした。養父は，天王寺商業という当時一番の商業学校か大倉商業のどちらかを受けろと言いました。そこに榎並が入って来て大げんかになりました。中学に行かせると。私の気持ちなど全く聞きもしません。榎並は大学まで行かせたいという気持ちがあったのですが，養父はそんなところに行く必要はない，そんな家ではない，と言う訳です。木村の家は，それでも中産階級というか，中流の暮らしはしていましたが。

今西：お父さんは主たる収入は，何で得ておられたのですか。

木村：なかなか説明するのが難しいのですが，もともと割と大きなこんにゃくの卸問屋をしていましたが，投機で失敗して，財産を全部失います。貧乏のどん底になったそうです。そこで，養父はなかなかの役者顔でしたから，太鼓持

ちにならないかと言われたんです。宴席の司会者のようなものですね。それで太鼓持ちになるのです。太鼓持ちとしては浜平という名前でした。なかなか売れましてね，収入は良かったようです。長屋に住んでいましたけど，近所からは浮いていました。塀の色からして違うんですよ。きれいにしてあって。

今西：玄関に盛り塩をして。

木村：そう。ただ，親父は水商売を家には持ち込みませんでした。私にも秘密にしていた。小学校の時の記憶で嫌だったのは，親の職業欄を書くときに，無職と書けと親父に言われましてね。嫌だったので，仕事の中身もよく分からずに「太鼓持ち」と書いたら，親父がびっくりして，太鼓持ちがどんな仕事か分かるか，やくざ映画で太鼓持っているあれだ，だから無職と書け，と言われたことがあります。それでも養父母にはとてもかわいがられて，特に母にはよくなついていました。ですが親父は，お前は本当の子じゃない，道に落ちてたのを拾ったんや，とかそういうひどいことを私の前で平気で言うんですよ。これは大阪の独特のものじゃないですかね。

2　浪速高校へ

木村：結局，大げんかの末，中学を受けることになったのですが，受験したのが浪速高校の尋常科，当時の超エリート校です。1000人以上受験して80人しか合格しない。ところが私の年になって尋常科が普通の中学と同等に切り替わりまして，他校と受験日が重なったこともあって，100人程しか受験しなかったんです。

今西：でも名門ですよね。

木村：東洋のイートン中学という向きもあって，確かに自慢ではありましたけれども，まあ，昔の旧制高校自体がエリート校でしたからね。大学もほぼ無試験でしたから。かなり独自な所があって，その独自性を公言してもいました。富熊雄という先生がいまして，晩年は少し不遇でしたが，京大出の人でした。旧制高校の尋常科（中学）の先生は皆教授や助教授で，帝国大学出身の人が圧倒的でした。その富熊雄先生は教頭だったのですが，入学してすぐの時に，こ

の学校は他の学校とは格が違うんだ，とはっきり言いました。口頭試問の時に兵隊になると言った者がいたが，ここは兵隊のための学校ではないんだ，兵隊になりたいのなら別の学校があるから，そっちに行けばいいんだ，と。

今西：戦時中にそんなことを言っていたのですか。

木村：そうなんですよ。そもそも身分が違うんだ，とはっきり言っていました。中学3年生の時に，海軍の大尉になっていた先輩が来ました。トラック島の大空襲（1944年2月）があった後でしたが，尋常科の生徒を全部集めて，いま戦局は大変なことになっている，と言うのです。びっくりしました。大したことはないと言われているが，何百機もの飛行機が来て，大損害を受けた，このままでは日本はやられる，と言うわけです。そして，戦争が続く限り日本はある，戦争が終われば日本はなくなる，だから戦争を続けるために海軍兵学校を志願しろ，と言うのです。

今西：その頃になると，軍が学校に強制的に割り当てて予科練等に行かせる，ということになっていましたからね。

木村：私の女房の妹の亭主はそれで海兵に行ったんです。その先輩の話は1時間程で終わったのですが，志願する者は残れと言われて，そうしたら4年生は不良で有名だったらから全員帰ったんです。

今西：すごいですね。

木村：3年生以下は残ったのですが，ひとりだけ，今同窓会の会長をやっている藤垣という男がすっと席を立って帰ったんです。最近同窓会で会った時に，あの時よく帰ったな，と言ったら，おれは行く気がなかったから，と言っていました。その時，富熊雄と藤田善晴という，東大教授で数学者の藤田宏の父親ですが，そのふたりが来て，「お前達，帰っていいんだよ」，と言ったんです。あくる日，海軍の大佐が来て，また全員集められました。前にも戦争の話をしに来たことがあって，人気のある人だったのですが，「昨日は根も葉もないことが言われて，ひどいことであった。あの話を聞いた君たちのことはすでに全員調べてある。一切口外してはならん」と。当の大尉は青くなって登壇して謝りました。おそらく，富熊雄が通告したんだと思うんです。全員が志願して困

惑している，これは軍事機密の漏えいだと。それで大佐が来たのでしょう。先輩は処分されたと思います。そういうことが大阪ではあったんです。

今西：珍しいですね。

木村：珍しいことです。欲しがりません勝つまではという状況の中で，私の女房なんかも戦争が終わったら死ぬんだと思っていたようですが，確かに私も戦災で死ぬ思いはしましたが，戦争が終わっても死ぬとは全然思っていませんでした。回想なんかでも，戦争が終わったら死ぬと思っていたと書いている人が多いですが，私は全く考えていませんでした。そういう学校が有り得たんです。ちなみに，蔵原惟人（評論家，故人）の『芸術論』が昭和14年（1939年）に中央公論から出ています。安岡章太郎（作家）も書いていますが，戦時中ではあったけれども，昭和10年代にはある種の猶予期間があったのだと。確かにそう思います。永井荷風（作家，故人）の『墨東綺譚』が出たのが昭和12年ですし，島木健作（作家，故人）の『再建』は昭和10年です。

今西：島木の『再建』は転向文学という要素がありましたらから。

木村：ですが，『再建』を読むとかわいそうに思うのは，転向の過程にありながら，なんとかして農民運動家達を守ろう，としているのです。『生活の探求』あたりになるとだいぶ変わりますが，『再建』はそういう移行過程の作品ですね。

今西：昭和10年代というのは，昭和モダニズムというか，大正デモクラシーの残影のようなものがありました。

木村：そういう流れもあったでしょう。ですから，富熊雄のような姿勢は，反戦・平和という根本思想から出たものではなかったと思います。大阪の人間というのは，例えば沖縄の問題について大阪人がどう考えるか，本気で考えるか，というと心もとないところがあります。要するに金が儲かったらいい，という判断をするのではないかと思うのです。かといって，国の命令にすぐに従う，というわけでもない。儲からん，と思ったらやらない。

今西：大阪は商工業都市ですからね。「もうかりまっか」というのが挨拶ですから。

木村：中学時代の思い出について，もうひとつ語りたいことがあります。ガタ

ルカナル島での戦闘が終わった時のことです。理科教室に全生徒が集められて合同授業がありました。ガタルカナル島の戦いは日本軍の撤退である，と富熊雄先生が話し出しました。転進でなく転退である。そして，撤退を重ねたらどうなる，ここまで来るんだぞ，と。

今西：本土決戦ですね。

木村：あの時期にこういう話をするのは危なかったと思うのですが。それで，ここにやって来たらどうなるのだ，我々は死ぬのだ，しかし，こんな状態のままで死ぬのはたまらない，だから自分は今生涯をかけて死ぬ気で数学を勉強している，お前たちも必死で勉強しろ，と言うわけです。あれは偉かったね。私には鮮明な記憶として残っています。藤田宏のような秀才も記憶に無いと言うのですが。しかし，こんなことを中学生に言ったら本来なら一発で捕まりますよ。

今西：そうですね，憲兵にやられますね。密告されたら終わりです。

木村：ところが，藤田をはじめ他の生徒は印象深く聞いていないんですよ。藤田の親父は爆撃で亡くなっていて，富熊雄にだいぶ世話になっているのですが。ですから藤田にはよく覚えておけ，と言いました。

終戦前の８月13日頃だったと思います。宝塚から山の方に入った所に川西航空の疎開工場がありました。もっとも電気もありませんし，操業など出来なかったのですが，本社が爆撃にあってやむなく疎開していました。我々はそこに動員されていました。終戦前の８月13日頃だったと思いますが，その工場への道を中学生３人で歩いていました。広島に原爆が落ちた後でした。もっとも原爆とは認識していませんでした。新型爆弾と言われていましたから。その時一緒にいた藤田が，これはもう降参だ，と。私も同じ意見でした。国体を護持して降参するしかないと考えていました。藤田は，あの爆弾は原爆だ，放射能を浴びたら死ぬんだ，と言うので，へーえと思って聞いていました。その時藤田は大きなカバンを持っていたので，何でそんなものを持っているんだと訊いたら，英語の辞書が入っているんです。これからは英語の時代だ，と。あの頃の中学生の発言ですよ。すごいと思いましたね。だいたい，その頃の大阪の一般の中

学生は死ね，死ぬと考えていて，一般庶民はどうしたらよいか，わけがわからないと思っていた。そういう時代に浪高尋常科はそれだけの人間がいたんです。ですが，それは反戦とか平和とかいうのとは違います。現実的解釈なんです。こういう現実主義的状況判断というのは今の日本にも必要ではないかと思います。ケネディの有名な演説，“Ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country.”（国があなたに何をしてくれるかを問うなかれ。あなたが国に対して何ができるかをこそ自問して欲しい。）何でもお上に恵んでもらおうという態度が目立つ今の日本人にとって，このケネディの言葉の精神が必要だと思うのです。

そういう現実主義的な主体的判断の欠如は，世論調査などにも表れていると思います。今の日本に世論というものがあるのでしょうか。マスコミの枠に創られたものでしかないのではないか，と観察しています。

今西：今は民衆も政治家もメディアもポピュリズムに走っていますね。

木村：アメリカには世論があります。あの国は世論で動く国です。

今西：確かに，今の貧困問題を見ても，アメリカ人は自分達で団体を作って闘いますからね。話を戻しますが，藤田宏さんはその後どこに行かれたのですか。

木村：藤田は東大です，理学部数学科。そのまま東大数学科の教授になり，日本数学会会長などを歴任して，日本数学界の長老のひとりです。東北大学の学長を務めた西澤潤一なんかと一緒に指導的人材育成のための提言書をまとめていまして，それは一言で言えば，旧制高校の復活を唱えているものです。立派なものですよ。

今西：大阪の同世代の人達，例えば開高健さん（作家，故人）や谷沢永一さん（評論家，故人）といった人達と中学時代に付き合いなどはありませんでしたか。

木村：開高とはありません。谷沢とは，彼が天王寺中学時代に出していた新聞が発禁になった時に会いました。個人的に癖のある男でね。

今西：彼は最初はマルクス主義者ですよね。藤本進治さん（故人）という在野のマルクス主義哲学者に中学の時に習っているんですよ。

木村：彼の最大の貢献は，コミンテルンが指導的役割を発揮したのは日本共産党に対してだけだということを明らかにしたことです。『反日的日本人の思想』（PHP 文庫）に書いています。文献学的研究としては，彼はなかなか独創的なことを言う人です。『雑書放蕩記』（新潮社）という本を読んでもそういう印象を持ちました。

今西：私も，『完本・紙つぶて』（文藝春秋社）等は，おもしろく読みました。さて，尋常科からそのまま浪高に進まれた後，東大の経済に入られるわけですが，東大入学は何年ですか。

木村：昭和23年（1948年）です。卒業が昭和28年，５年かかりました。退学になるところだったのですが，詫びを入れて赦免されて，卒業することが出来ました。ですが，その時の就職難のつらさは大変なものでした。つぶれかけていた時事新報社を受けて補欠で入りました。

今西：時事新報の記者をされていたのですか。

木村：はじめはそうです。半年程ですが。時事新報がつぶれたんです。それで同じビルに入っていた産経新聞に吸収されて，私も産経の記者になりました。産経をまともに受けていたらおそらく通らなかったでしょうから，得しました。

今西：1948年入学ということは，力石定一さんは少し上ですか。

木村：彼は１年上です。沖浦和光もそうです。沖浦は私の直接の親分です。私は彼の子分でした。

今西：木村さんの「ケツ」という綽名は，沖浦さんの後にくっついて歩いていたから，というのが由来ですか。

木村：そうではありません。あれは中学の時以来の綽名です。教練の時にズボンがとまらなくてね，それでついた綽名です。沖浦の子分だったというのは事実だけれども，大学紛争の時に決定的に対立しました。

今西：沖浦さんと知り合われたのは大学に入ってからですか。

木村：いえ，高校の時です。浪高の１年先輩ですが，当時彼の家は闇商売で儲けていて，マルクス主義の本を沢山持っていました。その頃にしてはかなりの数で，『資本論』も本棚に並んでいました。同人雑誌を作って，「共産主義に関

する一考察」なんて文章を書いていました。

今西：何という名前の雑誌ですか。

木村：『孤舟』です。「共産主義に関する一考察」の末尾には，「筆者は純正共産主義者であることを付記しておく」と書いてありました。高校生の頭で考えた典型的な文章です。

今西：浪高時代に書かれたのですか。

木村：そう。それで沖浦のところに行ったら，絶対共産主義だとさんざん言われて，私もそうだと思ったんです。でも，その中に入ろうとは思わなかった。そもそも木村家の考え方というのは，戦争があるのは仕方が無いが，自分が兵隊に行くことはないだろう，別な人間が行けばいい，というものでした。大阪の人間は平気でそういうことを考えるところがあります。

今西：現実主義というか，功利主義というか。

木村：何というのでしょうかね，まあそういう精神がありますから，例えば暴力革命といっても，民衆の旗，赤旗を守ると高く掲げはしますが，私の根底においてどこまでそう言えたか。こういう時，京都人というのは黙って逃げますね。

今西：そうですね。

木村：大阪人というのは，1歩2歩とやって，それから逃げるんです。田舎の正直な人間が最後までやってくれるだろうと。

今西：沖浦さんとは，読書会や研究会のようなものはやっていたのですか。

木村：読書会のようなものはやっていませんでしたが，やはり圧倒的な影響下にありました。共産党浪高細胞を作ったのも彼ですから。

今西：浪高細胞が出来たのは戦後ですか。

木村：そうです。戦前は無理ですよ。

今西：敗戦後の旧制高校には，そういう運動が起こってきますね。

木村：ちょうどその頃，浪高の校長が代わったんです。新任は，大阪府の官僚だと。それは浪高の体面にかかわると思ったわけです。悪い人ではなかったのですが。もっと学問的に格のある人に来てもらわないと困る，そんな役人では

駄目だと。当時東大浪高会というのがありまして，沖浦が東京に行って話を聞いてきて，東大浪高会の意思と称して今言ったようなことを彼が文章にして決議をしました。我々は新校長を拒否する，全校生諸君しっかりやれ，と。東大浪高会でもそうした決議をしたのでしょうけれども，浪高での決議の文書自体は沖浦が作ったものです。こうした活動は青年共産同盟がやりまして，その中心が私や吉岡幸男といった者達です。

今西：すでに青共を浪高の中に作っていたのですか。

木村：ええ。共産党を作るのはなかなか大変ですし，共産党に入党するということは相当決意のいることでしたから。それでまず青共を作ろうと。実質的には共産党ですが。天王寺の駅に近い所に拠点を設けて集まっていました。

今西：吉岡さんというのはどういう方なのですか。

木村：加商商事というところで商社マンをしていました，もう亡くなりましたが。浪高細胞のキャップでしたが，東大に入ってからは，共産党の活動家からは退きました。生活協同組合に入って，そこでずっとアルバイトをしていて，細胞の集会等には出て来ませんでした。将来何になるかという調査が細胞でありました。自分が何と書いたか記憶が定かではありませんが，職業革命家と書いた人間がひとりだけいました。大久保博司です。吉岡はサラリーマンと書いていた。そして実際にサラリーマンになったんだね。入社以後一貫してそこに勤めていました。高校は別でしたが，東大細胞で後に朝日新聞の編集局長になった人間がいました。おもしろいもので，いねむり党員といってデモにも出ないような人間の方がいい会社に入るのですよ。加商商事でも悪いとは言えなかった訳で，当時は就職できること自体が大変な時代でしたから。

今西：就職難でしたからね。

木村：朝日の編集局長になった人間も細胞では下っ端だったんです。記者時代に会った時もこっちは，「おうっ」，ってなもんですよ。政治部の記者は特徴的な服装があるんです。薄水色の背広を着るんですよ。政治部記者の制服みたいなものでね。彼もそれを着てキリッとしているわけです。こっちは下っ端だと思って会っていて，編集局長になったなんて知らないで話していました。です

が，そういう人間に限って，頭の中身は化石化しているというか，昔のままなんです。細胞活動でひどい目にあった人間，処分される，退学になる，逮捕されると，私は逮捕歴はありませんが，就職も難しい。そういう人間が現実にぶつかると，現実生活の中ではいかに左翼であるのが困難かということに直面せざるを得ないのです。これは珍しいことですが，産経新聞に入って1年目に両親を東京に呼んだんです。収入が無くて暮らしていけなくなっていたので。これは非常な負担でした。

今西：生活は大変ですね，当時は安月給でしたから。

木村：安月給もいいところすよ，月給1万3000円位の時でしたから。最初の試用期間の間は8000円位ですよ。背広も買えない程ですからね。これはつらかったです。結婚するにしても，同居が条件だったら当時も普通の女性は結婚しないですよ。それを承諾してくれたから今の女房を選んだというわけではないですけれども，彼女もやっとのことで承諾してくれたんです。ですから，社会人になってからの生活は，潜水艦のように底に沈んだ生活が10年ぐらい続きました。

3　東大入学と学生運動

今西：大学時代のことをもう少しお伺いしたいのですが，1948年に入学された頃は，後の読売新聞社長の渡邉恒雄さんはもう追放されていましたか。沖浦さんや力石さんたちと，主体性論争をめぐって渡邉さんは対立していたのですよね。

木村：東大細胞が渡邉を粛清した翌年に私が東大に入学しましたから，東大にはまだいましたし，学生の頃の渡邉を知ってはいます。反共の連中が自治擁護連盟というのを作ります。小松というボスが中心になって秘密会議を開いたんです。最初は公開でやるというので，様子を見てこいと言われて行きました。堤清二なんかも行っていました。横瀬郁夫という名前でね。途中から皆逃げ出したのですが，私はずっと残っていたんです。それで，変な人間もいなくなったから，場所を移して秘密会議をやろうということになって，私は付いて行っ

たんです。そうしたら経済学部の自治会で顔見知りの人間がそこにいたんです。それで，会議も終わり頃になってバレたんです。スパイがいると。黙って座っていればよかったのですが，私は逃げ出したんです。すると3人程に追いかけられましてね。その中のひとりが渡邉でした。捕まって詰問されて，私もどうすることも出来ませんでしたが，彼らの計画をほとんど聞いてしまっていましたから。ですが，その中に穏やかな人間がいまして，変なことをしているわけではないのだから，ということで，歩きながら話して別れました。あなたは何主義ですかと訊かれて，渡邉は修正マルクス主義ですと答えたことを覚えています。それが渡邉と学生時代に会った唯一の機会です。それから渡邉は新人会を作ります。日本テレビの氏家齊一郎（故人）は最初東大細胞の党員だったんです。

今西：氏家さんは渡邉さんに付いて行くんですよね。

木村：ええ。元々は東大細胞の経済学部のキャップだったのですが，そのうちに脱党して渡邉に付いて行ったんです。氏家というのはやたらに自己を語る男でね，まあ大した男ではないです。

今西：1948年は，力石さん達が共産党再建をやって，授業料値上げ反対闘争があった年ですね。

木村：授業料値上げ反対闘争は，私が入学した年の6月26日です。初めての全国ストで，126校が参加しました。その時，「戦略の転換に関して」という文書が出ます。秘密扱いにされて，今ではほとんど残っていないでしょうが。その内容は，これまで授業料値上げ反対で運動してきたけれども，大事なのはそうではない，大学管理理事会（BT）案反対の方が問題である，と。明確な反米闘争，反アメリカ帝国主義闘争というほどのものではありませんでしたが。大学外の組織による大学の管理に反対するというものでした。つまり，経済闘争ではなく政治的闘争に転換すると主張していました。

今西：それを指導したのは力石さんだったのですか。

木村：力石と沖浦です。私は兵隊でしたから，指導部のことはよく分かりませんが，沖浦の方が主導だったのではないかと思います。沖浦と力石の合作です

が。経済闘争から政治闘争へ転換するという表現が直接とられているわけではないのですが，そういう方向へ戦略を転換するということでした。そこには，学生はストに立ちやすい，とも書いてありました。学生大会で決議されれば成立するのですから。その時は私も全国オルグで大阪に行きました。当時の天王寺師範学校（現大阪教育大学）の大教室で，授業料値上げ反対とBT案反対を説明しました。大学管理法反対闘争の前哨戦です。奈良女子高等師範（現奈良女子大学）にも行きました。奈良女子に行ったのはちょうどストの当日でした。左翼教師と一緒になって学生大会でスト決議をとって，女の子ですから「さんせーい」というようなものでした。浪高には細胞が残っていましたから，必ずストに入りました。こんな風にいくつかの成果と称するものをあげて東京に帰りました。しかし，126校が参加するというのは予想外でした。宮本顕治も非常に驚いたそうです。

今西：それは力石さんも言っていました。

木村：30校位だろうと思っていたようですね。

今西：宮顕さんが情勢判断を誤っていたと。

木村：そんなものではない，と沖浦が言いに行ったようです。予想を大きく上回りまして，それで全学連が出来たんです。

今西：全学連の基礎ですね。

木村：その前に国学連（国立大学学生自治会連合会）というのがあったのですが，国学連だけでは駄目だ，私立も含めた全学連にしなければならないということになりました。その間に，国学連を作った直井寿は東大細胞から粛清されます。悪いことをしたわけではないのですが。不遇でかわいそうな人でした。

今西：文学部では，沖浦・武井時代，つまり沖浦さんと武井昭夫がペアで考えられていた時代があったようですが。

木村：そうですね，一緒にやっていました。武井は初代全学連委員長になりますが，演説がうまいということで。ですが，私自身は武井の印象は薄いのですよ。

今西：あまり感心していなかった。

木村：演説がうまいと言われて，確かに筋道の通った演説をするのですが，軽いんです。情熱的に感情的に人を説得するのは力石の方がずっとうまかったですよ。闘争的な演説という点では力石はすごいですよ。

今西：あの人は機転が利きますからね。

木村：うまかったですよ。力石というのは，人間的には少しいい加減なところがありますが，思想性の高さという点では非常に信頼しています。

私が後悔しているのは，権力と闘う時の政治的立場の取り方に関して私は非常にウブだったことです。その辺りが力石とは違うところです。無期停学中に教養学部を扇動して歩いたということで，学校から呼び出されたことがあります。私は出て行きました。「検挙と階級裁判に対する共産党員の基本的態度について」という論文が『アカハタ』に載りました。統制委員会名で出ていましたが，筆者はおそらく宮本顕治です。彼は統制委員会議長でしたし，非常に優秀な文章でした。そこには，自分がやったことを絶対に認めるなと書いてありました。認めることは転向であり裏切りであると。私は非常に感銘を受けて，皆にも配って回りました。アジって回っていたことは事実でしたし，それを目撃されてもいました。それで学校に出て行って，お前やっただろうと言われても，私はやっていません，と答えました。事実として確認されていることですから，否認効果などないのです。私は『アカハタ』論文を信じてそうしたのですが，失敗でしたね。ですが，東大というのは不思議なところで，後で処分を緩和するでしょう，そこで文書を書かされます。「私は，～において学部共通細則第13条に違反しました。右の事について遺憾に思います」，とそれだけですよ。今にして思いますが，本人の名誉を傷つけない程度の謝罪の表明に止めるのです。いかにも東大らしいと思いますね。私の場合はそれだけでは済まないので，許してもらいたかったですから，きちんと謝罪の言葉を一筆添えて提出しました。最初の態度は，とても幼稚なものでした。それは残念に思います。それにしても，私が学生時代に経験したこと，就職で苦労したこと，そして親を養ったこと，これは当時の学生としては稀有なものでした。

今西：東大はいいところの子供が多かったですからね。

木村：当時はそうでもなかったですよ。ですが，そういう苦労がありましたから，将来の生活への覚悟ということにはとても慎重でした。桃山学院大学に就職する際も，産経新聞で地下活動をやっていて立場がかなり危うくなっていました。その時に沖浦君が，桃山学院大学に来ないかと言ってくれたんです。

今西：それは何年頃のことですか。

木村：産経に入って10年位経ってからのことです。

今西：じゃあ1960年代に入ってからですか。

木村：そうですね。当時私は外信部にいました。外信部にいると後は特派員になるか，他に落ちるかのどちらかなんです。本当は特派員に行きたかったのですが，アメリカに派遣されるとバレるんです。

今西：ビザも出ませんしね。

木村：それでそろそろ危ないなと感じていたところに，沖浦からの話があったので，あえて私は乗ったんです。

4　レッド・パージ反対闘争，「戸塚事件」など

今西：学生時代に話を戻したいのですが，授業料値上げ反対闘争の後にレッド・パージ反対闘争がありますよね。そこでも活躍されたのですか。

木村：レッド・パージという言葉を作ったのは私なんです。

今西：そうなんですか。

木村：著作権は私にあるんです。

今西：確かに，レッド・パージは和製英語でアメリカでは通用しないですからね。“Red Scare”と言う言葉はあるようですが。

木村：最初英語では“Red mark”と呼んでいたんです。そこで私が，それでは弱い，レッド・パージにしろと言って皆も賛成しました。そのうち新聞とかでも使うようになったのです。

今西：岡田裕之さん（法政大学名誉教授）に言わせると，早稲田のレッド・パージ反対闘争を指導したのは木村さんだということなのですが。

木村：そうだと思います。私と松下清雄ですよ。早稲田は東大の代理のような

ものでした。10・17（1950年10月17日）で，143名の逮捕者を出した「全早大平和と大学擁護学生大会」は私と松下が組んでやったんです。ですから，その逮捕者達の裁判については非常に忸怩たるものがあります。裁判の時にはもう産経に入っていて傍聴に行くこともできません。

今西：あの時，早稲田の学生はかなり退学処分になっていますね。

木村：それはそうですよ。裁判にまでなっているのですから。

今西：大会で突撃命令を出したのが木村さんと松下さんなのですか。

木村：そうです。それは武井昭夫の影響なんです。東大でも，評議会で学生の処分を検討しているところへ，なだれ込めと命令したのは武井です。評議会の処分に対しては猛烈に反論しなければならないということで，ある意味では正しいのですが。それで，安田講堂２階の評議会室のドアをぶち破ろうと，がんがん叩いたものです。教授達は，うるさくて会議ができないというので，裏口から逃げだしました。そういうことを早稲田でもやろうと思って，とにかく突っ込めと命令を出したんです。撤退命令をすぐ出すべきだった。そこらへんが幼稚でしたね。警官隊が出動して横一列で入って来たんです。すごい数でしたから動揺しましたよ。窓から逃げ出した者も２～３人おりましたが，あとは皆捕まってしまった。143人逮捕されたわけですから，あれは学生運動史上未曽有の不祥事でしたね。ショックでした。その翌日，力石に，お前選択を間違ったんじゃないか，と言われましたけど，言われても仕方ないですね。ただ，松下がそのことを書いていないのはちょっと不思議です。松下は，その件で早稲田に居にくくなって，安東の誘いもあったでしょうが，（茨城県）常東の農民運動に行ったのではないでしょうか。

今西：松下さんは，まとまった記録を残していませんからね。

木村：スターリンの線をとった『ボリシェヴィク』という機関誌を出していましたけれども。当時の早稲田は群雄割拠で，色々な派がありました。

今西：東大はほぼ宮本派でしたね。

木村：東大では宮本顕治が絶対でした。その頃の宮本はすばらしかったですよ。先輩ですしね。よく東大にも来ていましたが，大きなお兄ちゃんのようなもの

でした。

今西：獄中生活が長かった宮顕さんにとっては，第2の青春だったのでしょうね。

木村：自分を尊敬してくれる学生と会えて嬉しかったのでしょう。

今西：その後，1951年に例の戸塚事件が起こります。あの時は現場におられたのですよね。

木村：全部見ていました。金子甫という，『資本主義と共産主義：マルクス主義の批判的分析』（文眞堂）を書いた人物がいます。経済学者です。彼とは親友だったんです。彼が私を批判するのです，共産主義だからこうなったのだと。彼の考えは徹底しているんです。まあ，言っていることは正しいのですけれどもね。東大教授になった比較文学の平川祐弘とは物言える仲なのですが，話の中で，昔運動をしていた自分達が教員になって，またその息子達が運動をやりだして，困ったものだと言う話になった。そうしたら金子がおもしろいことを言いました。「今の連中の方がましだ，あいつらは自分と自分の家庭にしか迷惑をかけていない，俺達は社会に迷惑をかけたんだ」，と。平川も，「そこまで言うのはいないね」と笑っていましたよ。平川は，『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』（エドワード・ラクロティンカー著，ミネルヴァ書房）を私が翻訳した時に，出版まで話を進めてくれたんです。

共産党への批判ということでは，私もキツイですが，金子の批判が一番キツイです。晩年の宮本顕治に接した人物は批判が厳しくなりますね。ですが私は，大学時代の宮本顕治のイメージが捨てられません。兵頭正俊（作家）が言うところによると，宮本顕治は宮本百合子を裏切っていたんですね。宮本には若い女性の秘書がいて，百合子が生きている間に関係を持っていました。モラルに厳しい人はそこを厳しく批判するのですが，私は宮本顕治に同情しますね，現実的に裏切らざるを得なくなっていたのではないかと。そのことで宮本を責める気にはなれません。宮本顕治がいたら，第2のリンチ事件は起きなかったのではないかと思いたい，そういう気持ちを持っています。

今西：ですが，宮顕さんはスパイ査問を許していたのですよね。

木村：許してはいたけれども，殴ってはいかんと言っていたようです。

今西：暴力は振るうなと。

木村：宮本の秘書をしていた高橋英典（元朝日航洋社長，故人）が，宮本にそう言われたと言っています。ところが原田長治（中国地方委員会）には殴れと言っていたらしい。そのふたつの指令をミックスして適当にやれ，ということだったようです。私は現場にいましたが，見ていられませんでしたね。あれは武井の陰謀です。戸塚秀夫というのは，全共闘に共鳴したりいい加減なところはあったけれども，例えば女性問題については純粋無垢な男でしたよ。

今西：査問事件では女性問題でも随分叩かれましたよね。

木村：あれは全部でっち上げです。「関係している」という曖昧な言葉で，さも肉体関係があったかのように言うのです。道徳に反する行為です。武井に直接言ってやろうかと思いましたよ。

もうひとり人物のことを言いたい。南原さんのことです。東大総長の南原繁。私は尊敬しているんです。ところが困ったことに，1946年に「アメリカ教育使節団」が来日した時，それを迎え入れる日本側の「教育家委員会」の委員長が南原さんでした。最初は文部大臣が委員長で，南原さんは副委員長でしたが，当初から実質的なトップで，後に正式に委員長になりました。この委員が中心になって「教育刷新委員会」が組織されましたが，それを文字通り「舵取り」していたのがGHQの指導する“Steering Committee”です。「舵取り委員会」と訳されました。戸塚に言わせれば調整委員会だと言うのですが，実質的に舵取りしていたのですから，訳語も認識も正しいでしょう。それを調整委員会としてしか見ることができないところが，戸塚の限界です。傲慢な言い方ですが，戸塚というのはその程度の人間なんです。確かに良く出来る男で，東大教授にもなりますが。彼の学問は的の手前で甘くなるような印象がありますが，理由はそこだと思うのです。東大の「ただの教授」に近い。人間的には正直な男で，相当なことをやっている人物ではありますが。

今西：ポポロ事件（1952年）の時もおられたんですか。

木村：ポポロ事件には半分以上関係しています。それは私が処分される頃です。

あの時ハシゴを使って警官に抵抗して逮捕された学生がいましたが，ちょうどその時私は有沢広巳学部長と学部長室で退学の交渉をしていて，そこに彼が逮捕されたという連絡が入って来たんです。その後彼は，ポポロ事件そのものではなく，ポポロ事件と警察に関わることで問題があって捕まったりもしています。彼はその後中国に渡って専門家になったという話も聞きますが，詳しくは分かりません。ですが，一種の犠牲者と言えるのではないでしょうか。ポポロ劇団そのものは元々単なる文化活動だったんです。有名な「プーク」の指導を受けて人形劇をやっていた団体です。それにしても，あの頃はよく警察が来ていましたよ。

今西：ポポロ事件は学生が学内で私服の警官を見つけて手帳を取り上げるというのが発端ですが，その手帳を見ると，当時京大天皇事件（1951年）等がありましたから，東大の学生が連動して不穏な動きをするのではないか，ということで随分注意していたようですね。

木村：京大のキャップをやっていた加藤，後に姓が変わりますが，彼もポポロと関係がありました。彼の婿入り先は裕福な家だったのですが，京大の全学連委員長になった米田豊昭と榎並公雄が「都市科学研究所」を倒産させた後，米田に金銭的に随分迷惑をかけられたんです。

今西：話は変わりますが，「Y」という軍事組織がありましたよね，山村工作隊等をやった。あれには関係されていないのですか。

木村：全く関係していません。ナンセンスですね。早稲田の津金が歩いて行くのを見たことはありますが。

今西：津金佑近さんですね。彼は山村工作隊に行っていますね。

5　桃山学院大学時代

今西：話は飛びますが，桃山学院に行かれてしばらく先生をされていたのですか。

木村：そうです。

今西：学園紛争の時に辞められたのですか。

木村：学園紛争で辞めたんです。桃山での学園紛争では，全共闘の赤軍派の学生に目を殴られました。学生と交渉中の教授に対する直接の暴力は前例がなかった。それに対する沖浦の指導する教授会が反対声明すら出せない。赤軍ファシズムを許すことになりました。その前はかなりきちんとした交渉をだいぶやっていたんです。その時沖浦が，結局最後に勝つのは若い者なんだよ，と言ったんです。そういう人間なんですよ，沖浦というのは。有名人願望が強い男で，文春新書で『旅芸人のいた風景：遍歴・流浪・渡世』という本を出すまでにはなりましたが，文芸評論家としてもセンスを感じませんね。沖浦がある時，部落に生まれたらよかった，と言ったんです。何を言ってるんだ，と思いました。そういう発言こそが差別ではないかと。そういう男なんです。

桃山時代の初期から中期というのは，私の生活の中で最も自由で，一生懸命やれた時期ですね。ただ，勉強したいと思って行ったのですが，勉強は出来ませんでした。共産運動をやらされましたから。あれは無理やりでした，強制的と言ってもいいです。沖浦にですよ。先輩後輩の関係というのはすごいですからね。

あの頃の桃山学院はレベルの低い大学でしたから，学生達が劣等感を持っているんですよ。私は東大出だというのを学生達に隠していたのですが，やがて漏れましてね。学生達に請われて話をしてくれと言われた時に，人間の問題は中身なのであって，学歴なんか関係ないんだ，東大を出ても駄目な人間は山ほどいる，自分の中身に依拠して生きることが大切なんだ，ということを一生懸命しゃべりました。教育には熱心でしたよ。必死でした。それだけやっていれば，研究とは両立なんかしませんよ。学生時代も，産経時代も，今でも，研究もしたいし執筆もしたい。けれども，義務もあって，すると義務の方を一生懸命やってしまう性質なんです。教養課程の授業を持っていましたが，１コマ90分の授業を180分やるなんてことは普通でしたよ。その頃の学生の中には今でも，同窓会があると呼んでくれる者もいます。一緒に夏目漱石の『三四郎』を読んだんですよ。それで「ストレイシープ（迷える羊）の会」というのを彼らは作って定期的に集まっているようで，そこに呼んでもらったんです。桃山を

辞めた後に移った龍谷大学ではそれなりに忙しくて，学生達とそういう風に接する時間は持てませんでした。

今西：今日は長時間どうもありがとうございました。